

後藤 絵美 (東京大学・特任准教授 計画研究 (B01) 分担者) 報告

Translations of the Qur'an and Gender Justice: The Case of Izutsu Toshihiko's Work in Japan

報告パネル名 PA-174: Reframing the Past: Gender Questions and Islamic Traditions in the Modern Era

報告パネル開催日時 2018年7月18日(水) 14時30分-16時30分

2018年7月、第五回中東学会世界大会に参加した。開催趣旨によると、同大会は中東・北アフリカを専門とする研究者が、互いの研究方法や研究成果、フィールドでの経験について報告し、それぞれの知見を交換するとともに、ネットワークを構築・強化することであるという。今回、私にとっては初めての大会参加だったが、この趣旨が予想以上に実現されていることに驚いた。スペインの陽気で開放的な雰囲気のおかげか、アラブの風情も感じるアンダルスの土地柄のおかげか、あるいは、会場となったセビリア大学のスタッフの運営能力の高さのおかげか、国際会議に特有のよそよそしさや不便さはなく、楽しい日々であった。

主催パネルは、**Reframing the Past: Gender Questions and Islamic Traditions in the Modern Era**と題して、「イスラームの伝統」と呼ばれるものが、現代においていかに再構築や再創造、再生産の中にあるのかを、ジェンダーに関わる複数の事例から明らかにするものであった。聖典クルアーンの邦訳を扱った私自身の報告では、20世紀の日本で、「学術的であること」や「宗教的に中立であること」に価値を置いた翻訳者らが、古典クルアーン注釈書に依拠して邦訳を行ってきたこと、その結果、中世的で男性優位のジェンダー観がクルアーンの邦訳書の中に再生産されてきたことを指摘した。

報告に対して複数の参加者から有益なコメントをいただいた。また、自分自身の関心に従って、いくつかのパネルに参加した。近代における「法」の翻訳の問題を扱ったパネルや、ヨーロッパのハラール産業に関するパネル、民俗誌を書くことについて考えるパネルなどでは、新たな発想や思考の広がり、そして人的ネットワークを得ることができた。

日本の大学の学期中の開催であり、また猛暑や長距離の移動もあって、6泊7日(うち機中泊2泊)の旅では、かなり体力を消耗した。帰国後は完全復帰までに時間がかかったが、それでも、本当に貴重な時間を過ごすことができたと思う。次回の大会は4年後だそうだが、今から楽しみである。

